

本を選ぶ

NO.439 2021年(令和3年)12月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

- <ろん・ぼわん>〈石巻 まちの本棚〉という場所
- 選書の法則:S.R. ランガナタンからの187のメッセージ(18)
- 「今しかできないことを」ーフランス旅行④
- 帰ってきた図書館員(63)
- 図書館を離れて(第55回)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

〈石巻 まちの本棚〉という場所

●丹治 史彦●

一箱本送り隊が石巻のみなさんと運営している〈石巻 まちの本棚〉は、JR石巻駅から800メートルほど、アイトピア通り商店街のほぼまん中に位置している。地方都市によくあることではあるが、2007年に近郊に大型ショッピングモールがオープンして以来人の流れが大きく変わり、町を歩く人の姿が減ってしまった。そこに2011年の津波が襲来した。〈まちの本棚〉の建物も1階部分は天井近くまで海水に浸かったという。

この建物は^{たん}就書房ビルという名前が示す通り、かつては1階が書店であった。ご主人が亡くなって以降(大震災の前から)書店の営業は終えていたが、「本のあるコミュニティスペースをつくる」という目標で場所を探している中で、誰からともなく「あの場所がいいのでは？」という声が聞こえてきた。就書房は坪数こそ小さいが児童書から思想書哲学書までを並べる品揃えで、石巻の読書人たちが集う場所だったという。一時は出版も手がけていたらしい。話を聞けば、中学高校の頃に背伸びして難しい本を買った思い出を語る人も多かった。ビルオーナーのSさんは就書房の奥さまで、いまもビルの3階にお住まいだ。「本のある場所として使わせてほしい」という私たちの申し出に最初こそ躊躇っていたらしい

が、話し合いを重ねる中でこちらの思いに共感してくださった。

そのSさんがある日、新聞の書評をもって声をかけてくださった。

「この本『サードプレイス』って言うんだけど、もしかして〈まちの本棚〉のような場所のことなんじゃないかしら。私、読んでみたい」

オープンから数ヶ月が経っていたが、本屋なのか図書室なのかイベントスペースなのか方向性を模索して迷走しはじめていた私たちには一筋の光のような言葉だった。サードプレイス。まさに私たちが作ろうとしているのは「本のあるサードプレイス」だった。買い物の途中や学校帰りに、ふらっと立ち寄って本を眺め、手に取り、読む。宿題をしていてもかまわない。お茶のみ話をしたっていい。職業や立場に関わらず、本が身近にあって人が集う、そういう場所があってほしい。それが原点だったと思い出させてもらった。

今年秋、10回目の〈一箱古本市〉を記念して、小学校教員でもあるスタッフのKさんがイベントのチラシや写真をまとめた壁面展示を企画した。準備をしながらKさんがつぶやいた。「写真を見ると、この場所にはいつもいろんな人が集まっていたんだなあ、街もずいぶんと変わったけれど、少しずつ良くなってるなあって実感します」

〈まちの本棚〉は小さな場所だ。蔵書数も販売力も小さい。それでもこの街のひとつの燈のような場所に、誰かのサードプレイスにみんな育てていきたいと思っている。(たんじ ふみひこ:信陽堂)

選書の法則： S. R. ランガナタンからの187のメッセージ (18)

吉植 庄栄

18. 第三法則と選書・下

『図書館選書論第2版』の内容を、ランガナタンがよく使った架空の対談方式で紹介する。第三法則に基づく選書論も今回で最終回。

【登場人物】

○ランガナタン：図書館界のビッグスター、S. R. ランガナタン (1892-1972) 先生。

○第三法則くん：ランガナタンの著作『図書館学の五法則』に出てくる「いずれの図書にもすべて、その読者を (Every book its reader)」という3番目の法則。原作に倣ってしゃべります！

○選書担当の変化

ランガナタン (以下「ラ」)：第三法則くんの最終回である今回は、選書の責任や義務について考えよう。
第三法則くん (以下「三」)：わたし、今回結構しゃべりますよ。

ラ：よろしく頼む。さて、選書の体制も大分良くなったのだよ。

三：昔は酷かった話、ありましたよね。爆笑したのがイギリスのある公共図書館運営委員会 (図書館員ではなく有識者の委員会) の選書委員が、「私は読書に興味が無いので本に対して知識が無い、だからどんな委員よりも中立に本を選べるんだ。」とどや顔で言っていた話です。あれはウケました

ラ：それな、ほんと。言うて今だから笑えるけど、昔はそんなのがゴロゴロ居たのだよ。

三：そんな皆さんは、本を選ぶ基準なんか分からないですよ (汗)。利用者が必要とするかどうか、図書館の方針に合うかどうかなど様々な項目があるのに。

ラ：そうなのだ、その他に自分が詳しい分野ばかり選ぶ委員も多く居た。ほんとに酷い時代だった (遠い目)。

三：公共図書館だけの話ではなく、大学の先生もですよ。

ラ：そうだ。自分の専攻の本ばかり、それもほとんどの利用者が読めないドイツ語とかフランス語の専門書ばかり選書する。で、その後は利用者が手にも取らない、酷いものだよ。

三：今のような図書館員が居ない時代だったことも

あり、他に選ぶ人も居ないから年度末に笑える風物詩があったようですね。

ラ：その通り。学科の主任教授が「もうすぐ年度末だが、まだ図書購入予算が残ってる。皆、手分けして別の大学の図書館に行き、本学に無い図書をリストアップしてくれたまえ。それを発注しよう！」と毎年。

三：(苦笑)。公共も大学も図書館の専門職が配置され、図書館員に選書業務が任されて大分利用者に使われる蔵書になりましたよね。

ラ：そうだ。図書館員、特にレファレンス担当は普段から利用者に接していて、必要とされる図書を肌身で感じている。そのような利用者に近い図書館員に選書業務が任される良い時代になったよ。

三：先生の言葉ですが「選書は利権」なんですよ。公金を使って図書を買う訳です。ですから、利用者みんなのことをよく知る現場の図書館員が代表を勤めるのは当然です。そのような代表が選んだ本は皆に使われます。

ラ：そうそう。ただし学校の教員や様々な専門家との協力は大事で、選書体制に組み入れるのは大事。全部図書館員でやっつけてしまおうとするのはやりすぎだ。

○会計年度って困るよね

三：私が困ることの1つに、会計年度という仕組みがあります。

ラ：つまり毎年3月31日で年度が変わることだな。ずばり、年度末予算の消化で選書が最後適當になることだろう。

三：まさにその通りです！筆者さんも、若いころ年度末締切に追われて資料の質より価格が目に行ったそうです。年度内に予算を消化し尽くす必要に迫られ、悲劇が毎年繰り返されます。

ラ：はあー (嘆息)。単年度主義の仕組みだとしても、年度当初は恐る恐る消極的に選書する。しかし1月を過ぎたあたりから急に使い切ろうとす

る。となると本の内容より、いくらお金を消化できるかが重視されてしまう。

三：特に外国の資料は、発注してから納品まで時間がかかるので、到着まで枕を高くして眠ることができません。

ラ：うん。この1～3月は第三法則くんにとって軽視されがちの毎年嫌な季節だよ。私が工夫を提言しても、なかなか実現しないから毎年悲劇が。

三：ほんと、そうなんです。本当に腹立ちます！

○図書館員も責任もってやろう

ラ：選書を担当した図書館員は、利用者の声の代弁者であることを忘れてはならない。

三：はい、権限を得た途端に誤用、下手をすると悪用する奴もいます。

ラ：そうだ。君の話だと、ある政府機関の長官の大学生のお子さんがシェイクスピア研究をしているという理由で、その機関の図書室の選書担当者が全然関係無いシェイクスピア作品を数多く選書したそうではないか。

三：そうなのです！もう聞いた時、激おこで「お前らの血は何色だ！？（違）この図書室にシェイクスピアおかしくない？一体誰が読むんですか？あなたはゴマすりで図書館を駄目にしたんですよ！！」と問い詰めました。

ラ：(怖) お察しする。で、これはまさに責任と権限の悪用だが、こんなことをしていると、利用者に失望されて図書館の権威を失ってしまう。

三：これは極端な例ですが、他によくあるのが本人の狭い専門知識での選書、個人的な興味関心で選ぶことも誤用の原因です。

ラ：そうなのだ。利用者を知っているということで任されている図書館員が、自分を絶対者だと思っただけはいけない。前回も話したように、筆者さんだってライトノベル業界のこと、これまで全然知らなかった訳だ。でも公共図書館にはヤング・アダルトコーナーや小説コーナーに数多くのライトノベルが並び、利用者に愛されている。

三：そうですよね。「図書はみんなのもの」の精神から、任された図書館員もどこか「全ての人の望むことは全て知っている訳ではない」という謙虚な気

持ちをもって日々努めて欲しいですね。

○まとめるよ

ラ：さて、いよいよ第三法則くんともお別れだ。筆者さんの都合で登場まで数年かかってしまったが、3回よく頑張った。

三：はい、私のくんだりをまとめると次の通りです。

- ・本は自分でアピールできないので、図書館員が利用者に繋げる！

- ・利用者が手に取る可能性の高い本を類推して選書！

- ・そのために利用者を知ろう！

- ・流行り廃りがあるので注意！

- ・任された選書の権限に責任を感じて、謙虚に選ぶ！

ラ：うむ、これこそ利用者に愛される図書館の基礎だな。次は第四法則くんだな、「時間を節約するため」という観点での話に注目だ。

三：やっと出番が終わり、肩の荷が下りました。また会いましょう！

○この場を借りて

ラ：令和3(2021)年10月14日に『図書館の歩む道：ランガナタン博士の五法則に学ぶ』(2010)の作者、竹内哲(たけうち さとる)先生が享年93歳で涅槃に入りこちらに来た。彼には吾が思想の基本を日本に広めてくれて、本当に感謝している。

三：ご冥福をお祈りします。竹内先生の著作とお人柄に筆者さんは、ずいぶんと学んだそうですよ。

ラ：そうらしいな。少し前にこっちに来た吾が息子(Yogeshwar Ranganathan, 1932-2016)も、飛行機で竹内先生と一緒にになったことが切っ掛けで親交を深めたようだ。吾が図書館哲学も、竹内先生を通して日本の様々なお弟子さんや筆者さんに伝わったかと思う。弟子からその孫弟子へ、そしてその次の世代へと内なる真理が永遠に伝わっていく。これこそ、まさに成長する有機体の中の「何があっても変わらぬ中心核」だ。これを読んだ皆さん、是非『図書館の歩む道』をはじめとする竹内先生の著作を読んで、図書館に関わる者としての境涯を深めて欲しい。

(よしうえ しょうえい：盛岡大学文学部)

「今しかできないことを」 - フランス旅行④

溝上 牧子

今しかできないことだったフランスの旅もこれが最終回だ。

旅にはハプニングがつきものだ。何を隠そう、私と友人のFと一緒に旅するとなにもなかったことがないくらいハプニングが起こる。そのおかげでそれぞれの旅は忘れられない旅になっているのだが…。このフランス旅行でもそれは遺憾なく発揮された。

初めに空港に迎えにきてもらった時に、もしも迷子になった場合の行動をFからレクチャーされた。彼女は先々のことを想像して色々備えるのが得意だ。2人旅の時にはそこまでではないが、今回は4人で動き回るため必要だと思ったのだろう。まず電車に一人乗り損ねて置き去りになってしまった場合…。対処方法はこうだ…目的地(降車駅)を覚えておく、そして次に来た電車の同じ位置から乗車し目的地に向かうこと。先に到着した人たちは、その目的地の駅のホームで待つというもの。そして翌日、私はその張本人となった。言葉が自由にならない場所で、対処方法を知っていると言う事は安心感があるが、言われた通りになるとは…情けない。トホホである。

そして最終日が極めつけだった。フランスはよく交通機関のストがあると聞いてはいたが、帰る前日のニュースでストの情報が流れた。電車と航空会社のスト。2重のスト。情報確認も含め列車の駅に帰りの切符を買いに行く。聞くとところによると、電車のストは回避されるよう。さて航空会社は？友人のMが、電話して空港に確かめてみたらと心配そうに言った。しかし空港でも、あまり詳しいことはわからないようで、当日空港に行くで確かめてみてと言われる。

友人のFとも、ここアルルでお別れだ。彼女はここから特急でパリへ戻る。翌日電車を待つ間にFが「一応覚えておきな」とストというフランス語の単語を教えてくれた。やがてマルセイユ行きの電車が走り出す。しかし眠い…。マルセイユ空港からは国内線でシャルル・ド・ゴール空港へ移

動して日本に帰る予定だ。乗った電車は途中に空港の最寄り駅がある。そこで下りれば空港は近いはず。到着する時間もわかっているし大丈夫と思っていたが…それは間違いだった。なんと3人が3人とも、寝てしまったのである。目が覚めると多くの人が降りていく駅があり、ぼんやりと降りる人を眺めているうちに電車は出発した。そしてしばらく走行する車窓をみながらチケットと時計を確認してはっきり目が覚めた！さっきの駅が空港駅だったのだ！

隣にいた男性が何事かと私たちを見ている。英語で質問すると「さっきの駅だよ」と気の毒そうに、でもちょっとおかしそうに笑われた。ガイドブックを見るとマルセイユから空港行のバスが出ているようだ。こういう時に一人でないのは心強い。とりあえずバス停とチケット売り場を見つけ一番早い便のチケットを買ったが、国内線に間に合うか微妙なところだ。バスは乗るはずの飛行機の時刻ギリギリに到着。諦めが先立つが空港を走った。空港内は動きを止めたように薄暗い。おや？と思い窓口に行くと、Fに教えられたストの文字があった。やはり管制塔のスト。

乗り遅れは免れたものの日本に帰れない。どうしたらいいのだろう。頼みの綱のFもいない。私たちは途方にくれた。今日中に飛行機は飛ばないだろう。言葉もわからない。

ふとH I Sでもらった緊急の場合の連絡先を思い出した。電話をして事情を話すと、なんと窓口と交渉してくれるという。窓口で埒が明かないとしかめっ面だった女性に電話を替わり、H I Sの彼女はその女性と私と交互に話をしたのち、なんとその夜の宿と次の日の航空券を全て手配してくれたことがわかった。もしも誰にも助けを求められなかったら…と思うとゾッとする。帰りは一日遅れだったが、買った切符より条件の良い直行便で日本に戻ることができた。忘れられない旅には必ずおまげが付く。

(みぞかみ まきこ：朔北社)

帰ってきた図書館員 (63)

—ヘアドネーションについて—

山下 青葉

本誌 435 号で、(株) クラシップの田口京子氏が、今年 6 月に出版された『31 cm～ヘアドネーションの今を伝え、未来につなぐ～』（監修：NPO 法人 JHD & C (ジャーダック)) を紹介され、ヘアドネーションについて書かれていたのを拝見し、4 年前に読んだ『髪がつなぐ物語』（別司芳子著／文研出版／2017）という児童書を久しぶりに思い出し再読した。

当時、お世話になっていた美容師さんの転勤先の美容室が成人女性用の医療用ウィッグを作っているところで、大人向けにそういうことをしている美容室があるというのを初めて知ったところでたまたま見計らいで来ていたこの本を読んで、確かに子どもでも病気の治療のために髪の毛がなくなってしまうことはあり、ウィッグを作るとしたら、きっとかなりお金がかかり、医療費に加えて相当な負担になるだろうということは想像されたので、とても意義のある活動を始められたのだなと感心したのだった。

『31 cm』を監修されたジャーダック代表の渡辺貴一氏は 2008 年に念願かなって自身のヘアサロンをオープンさせた時、「ただ髪を切ってお金をいただくだけでは、ただ美容室が一軒ふえるだけ。髪をなりわい生業としている自分たちだからこそ、できる活動をしたい」と、アメリカで 1997 年に始まっていたヘアドネーションを日本でも始めることに思い至り、翌年の 2009 年にジャーダックを立ち上げた。

『髪がつむぐ物語』では、幼稚園の時から髪を伸ばしていた小学校四年生の美空ちゃんが髪を切るにあたってジャーダックの活動を知ることになり、詳しい話を聞くために 2016 年に当時大阪・梅田にあったジャーダックの事務局を訪れるところから始まり、小学校六年生の愛夕ちゃん、中学校三年生の咲季ちゃんがジャーダックでウィッグを作るまでの経緯とその後、髪の毛を寄付する側として北海道帯広三条高等学校放送局のメンバーの活動、従兄が病気治療で使用した薬の副作用で髪がなくなった事を知ったのをきっかけに五歳の時から寄付を続けている仁君のエピソードが描かれている。

著者にヘアドネーションについてのいろいろな事を伝えたいという思いがあるからか、何となく話があちこちに飛ぶ感じはしたが、子どもに向けてわかりやすい書き方がされており、活動の意義がよく伝わり、公共図書館や学校図書館にあるべき本と思ったので、自身の勤務先でも購入して紹介もした。

自分として一番印象に残ったのは、仁君のエピソードで、昭和から 30 年近くも立とうというこの時代に、男子が長髪でいることにこれほどの偏見があるのかというのに正直びっくりした。つい最近も新聞の投書欄で、確か中学校三年だったかの男子が、自分の嗜好で長髪にしていたのだが周囲が男のくせにとあまりにもうるさく、現在は髪を切ったが（年齢的に受験対応か？）また長髪にするつもりということが書かれていて、仁君のことを思い出し、なんだかなと思ったのだった。

このことは、田口氏もふれられていたジャーダックの目指す「必ずしもウィッグを必要としない社会」とつながっていることではないかと思う。

ウィッグを作るのは圧倒的に女子が多いと思われるが、「髪は女の命」という古くからある言葉に代表されるような、男子と逆の意味でのある種の縛りが女子にはあるからと思うのだ。

ウィッグをつけるか否かを本人が選択でき、その選択が尊重される社会は、誰もが生きやすい社会ということでもあると思う。

この度のコロナ禍で、ジャーダックも事務局を閉鎖、ヘアドネーションの受入も中止となり、ウィッグの提供もストップしてしまったとのこと。一時は団体の解散もあり得る状況もあったもののレシピエント（ウィッグの提供を受ける人）とドナー双方から多くの励ましがあり、またパートナーカンパニーの株式会社アデランス（アデランスとの関わりについても『髪がつなぐ物語』に書かれている）と「非接触のメジャーメント（頭のサイズ計測）システム」に取り組み、ウィッグ提供を再開できる運びとなったとのことである。（やました あおば）

図書館を離れて (第55回)

— 時代小説の中のお仕事女子③ —

並木 せつ子

職人、料理人、商人などにまじって、意外に多いのが医者だった。シーボルトの娘（楠本イネ）はともかく、江戸時代に女の医者がいたのだからとは思ったが、捕物帳にしても人情話にしても、そして現代小説でも、医者は小説にしやすい職業である。史実はどうあれフィクションでもあるし、女の医者が出てくる小説が多いことに不思議はない。しかし医療史の本を読んでいるうちに、江戸時代にもく女性はまったく医術に関わらなかったわけではない。……医師の手伝いをしていた女性が多くいたようであるという趣旨の文章に出会ってしまった。＜江戸時代、医師は男性の職業であった＞という定説は、職人など他の職業と同様であるが、＜男の医師に診てもらうのをいやがる女性もいたから、それらの女性助手たちが女性の治療に当たっていたと考えられる＞。女の医者がいなかったのではなく、記録に残ることがなかっただけなのだ（『江戸よ語れ』）。乏しい記録の中からでも、野中兼山の娘・婉子、俳人でもあった度会園女、『産科指南』の共著者・森崎保佑、柳田国男の祖母・松岡小鶴など何人かの女医の名がある。実際にはもっとたくさんいたはずなのだ（『吉岡彌生』）。

江戸時代以前には、医師になるための資格制度はなかった。性別身分を問わず誰がなってもよいわけだが、誰もがすぐにできるという仕事でもない。医師になるためには、医師の弟子になる、幕府・藩の医学所や私塾で学ぶ、などの方法があった。医師の家系の息子、そして儒者、下級武士、浪人、部屋住みの次男三男などが多かったという。さて「お仕事女子」たちはどのようにして医者になったのだろうか。

杉本苑子の『江戸芙蓉堂医館』の半井千鶴は幕府の奥医師で法印という高い地位の父を持ち、兄も表御番医という医者一家の生まれ。「半井」という姓は足利將軍家の医師の中にもいたので由緒正しい家系と思われる。千鶴は父の助手として修業後、16歳で官立の医学館に入学して本道（内科）、

外科、本草学、産科、鍼灸を学んだ。21歳で独立して芙蓉堂医館を開業、病人には慕われているが、親戚一同からは「千鶴の医者道楽」としか受け止められていない。

井川香四郎著『番所医はちきん先生休診録』の八田錦（はったにしき）は番所医。この役職名は江戸幕府の組織図などに出ていないが、錦の仕事は町方役人の健康維持の他、検屍や獄医のようなこともする。亡父は小石川養生所の医師だった。高名な医師に弟子入りし本道、外道（外科）、骨接ぎ、薬事を学んだ後、長崎に遊学し蘭方も学んだ。錦が医学にのめりこんだのは「医師の世界は腕が勝負……身分に関わりなく自分を活かすことができる」からだったが、腕利きでも女の医者はしばしば揶揄の対象になる。

宇江佐真理の『斬られ権左』の主人公・権左は仕立て屋であり、与力・菊井数馬の小者（手先）でもある。頭や顔など体中に無数の傷があるので「斬られ権左」と呼ばれている。権左の妻あさみが医師で、権左の傷はあさみを守るために負ったものだった。あさみの父・麦倉洞海も八丁堀の外科医である。あさみは長崎で5年間医学を学び、戻ってきたのは19歳のとき。多くの縁談の申し込みがあったが「医者を続けたい」と断り続けた。すると断られた男の一人が逆恨みしてあさみを襲い、危機一髪のところを助けたのが権左だった。傷は父・洞海も見放すほど重篤な状態だったが、あさみは絶対助けると必死で看病を続けた。のちに回復した権左と所帯を持ち、娘を生むが医者も続けている。

藤原緋沙子の『藍染袴お匙帖』の桂千鶴は、藍染橋の袂にある桂治療院の医師。父の桂東湖も医学館の講師を務めるほどの医師だったが、千鶴が長崎に留学している間に急死した。本道も外科も習得した千鶴は藍染の袴を身に付けて、父の残した桂治療院で診療に励む。また奉行所の犯人捜しの探索や検屍、女囚の牢にも出入りするなど医師として確固たる地位を築いている。

馳月基矢の『姉上は麗しの名医』も、母は既に亡く父は医師。真澄と清太郎の2人は姉弟だが、医学に熱心なのは26歳の姉上。真澄は喜多村直寛という名門の医師のもとで学んだ。許婚がいたが8年前に医学を学ぶため長崎へ行ったきり消息不明。髪も結わず袴と羽織という変わった出で立ちで往診に出かける。

沢田瞳子著『京都鷹ヶ峰御薬園日録』の本岡真葛は21歳。父は京の町で医院を開業していたが、母が亡くなると長崎へ遊学に行きそのまま消息不明に。そのとき3歳だった真葛は父の友人・信大夫に預けられ大切に育てられた。信大夫は禁裏御典医で御薬園預という職だったため、真葛は幼い頃から薬園で遊び、手伝っているうちに薬草の知識を身につけた。さらに信大夫は本草学、本道、外科を教え、産科、児科、鍼灸もそれぞれの専門の師のもとで学ばせた。今では真葛に診たてを請う病人が鷹ヶ峰まで来るほどである。

あさのあつこの『おいち不思議がたり』も父が医者だ。おいちは16歳、深川の長屋で町医者をする父・藍野松庵の手伝いをしている。母はおいちが5歳のときに亡くなった。父の仕事を手伝ううち医者になりたいと思うようになっていたが、死と隣り合わせの出産に立ち会って「女のための医者になりたい」という気持ちを固める。

ここまでの7人は父親が医者なので医術を学び

やすい環境にあったが、腕利きの医者になってもなお「千鶴が男だったらなあ」「真澄どのが男であればこの上ない逸材…」などと言われ、なかなか一生の仕事として認められない。医者などやめて嫁に行くよう促されるのである。『藍染袴…』の千鶴のお相手は幕府の役人・菊池求馬。役向きで大坂へ旅立つ前に「千鶴殿を妻にしたい」と告白され、戻るまで待つてほしいと言われた。千鶴もそのつもりのようなが、武家に嫁入りしたら医者仕事を続けるのは難しからう。求馬よ、どうするのだ。『江戸芙蓉堂…』の千鶴と、『京都…』の真葛にも“気になる人”はいるのだが、二人のお相手は同業者なので何とか医者続けられるかもしれない—など、近所の世話焼きおばさんのように、それぞれの行く末を案じながら読んでいる。

『おいち…』は最終巻で、医者続けながら所帯を持つ決意をする。おいちは飾り職人の新吉が好きなのに、一生医者として生きたいから所帯は持てないと悩み続けていた。伯母のおうたは「医者って仕事をしながら所帯をもつ。…おまえはすごいことをやろうとしているんだよ。…おいち、女はね、誰でもすごいさ」と、おいちの迷いを引きずり出して、その上で励ましてくれた。背中を押されたおいちは苦勞の多いだろう道を一步踏み出す。新吉はそういうおいちが好きなのだ。

(なみき せつこ)